石川・畝田（うねだ）・寺中（じちゅう）遺跡

1 所在地　石川県金沢市畝田西三丁目ほか

2 調査期間　二〇〇二年度調査　二〇〇二年（平14）四月～一二月

3 発掘機関　㈶石川県埋蔵文化財センター

4 調査担当者　浜崎悟司・岡本恭一・立原秀明・荒木麻理子・金山哲哉

5 遺跡の種類　集落跡（官衙関連遺跡か）

6 遺跡の年代　縄文時代～中世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

（金　沢）

畝田・寺中遺跡は、犀川・大野川河口部の扇状地上に立地する、縄文時代から中世までの複合遺跡である。畝田遺跡・畝田大徳川遺跡の二遺跡と隣接し、調査では三遺跡を便宜上一体として扱っている。本年度の調査は四年目にあたる。

これまでの調査では、弥生時代、古墳時代中期から後期、奈良時代から室町時代の遺構を確認している。遺跡の中心は奈良時代で、建物数棟を確認しているほか、旧河道・溝から木簡八点（本誌第二二・二四号）や二〇〇点以上の墨書土器が出土している。付近には港湾関連遺跡として知られる戸水C遺跡や金石本町遺跡があり、両遺跡とも何らかの関係を有する官衙関連遺跡であると考えられている。

今回の調査では、新たに縄文時代後晩期の遺構が加わった。また、調査地の北西部で奈良時代のものと考えられる大型掘立柱建物一棟と倉庫八棟を検出し、遺構の面からも官衙関連遺跡の可能性がさらに高まった。

古代の遺物は、遺跡を南北に蛇行して流れる河跡と、その西側を北流する溝から出土している。今回紹介する二点の木簡は、いずれも後者の溝から出土した。この溝は、一九九九年度調査で出挙関連木簡が出土した（本誌第二二号）溝SD〇三一の延長部分にあたる。

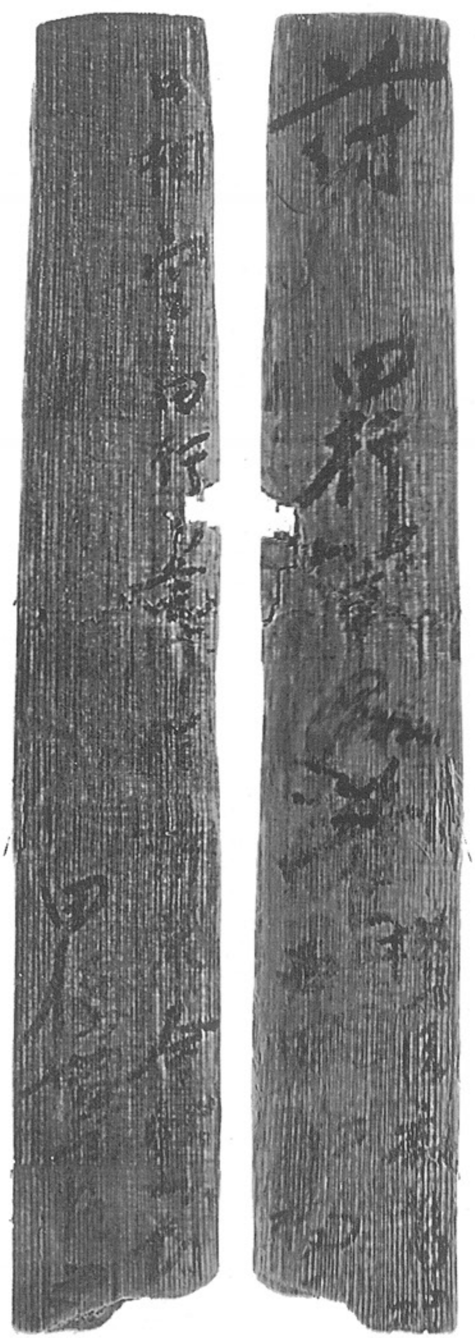
8 木簡の釈文・内容

(1)

・「符　田行笠□等横江臣床嶋□
　　　西岡□物□〔部カ〕

・「□相宮田行率召持来今□以付〔船カ〕
　　　田領横江臣『□』

(278)×42×3　019



(1)

(2)　・□□山村里」

・□□　　」　　　　(84)×22×2　059

(1)は、下半部を欠損した郡符と考えられる木簡である。差出人は加賀郡司、宛所は田行笠某であろう。現存する中央部に刃物痕跡が確認できるほか、欠損部には裏側から刃物を入れて折りとったキリオリ痕跡が認められる。郡符木簡の多くが二尺であることから考えると、本木簡はほぼ中央で折られ、廃棄されたものと推測できる。表にみえる「田行」は、本木簡が初出の職名である。裏面の「田領」と同様、田畑の管理に従事したいわゆる郡雑任と考えられる。裏面の「口相宮」は神社名を表すものとも考えられるが、本遺跡周辺には比定すべき神社の存在は知られていない。具体的な内容については明らかではないが、加賀郡司から「田行笠□等」宛に、「横江臣床嶋」ならびに「西岡（部）」、あるいはその他数名の召喚を命じたものであると考えられる。

表裏に登場する二人の「横江臣」については、『日本霊異記』にみえる越前国加賀郡大野郷畝田村に住む横江臣成人とその母成刀自女の説話が注目される。宝亀元年（七七〇）のこととして記されるこの説話と、木簡の年代である八世紀中頃から後半は極めて近い時期であり、これまで説話中のこととして語られてきた横江臣の存在

を裏付ける初の出土資料として重要である。

(2)は付札木簡である。上部の半分以上が欠損しているが、キリオリ痕跡が認められないことから、廃棄後の破損と考えられる。「□□山村里」は人名または地名と推定されるが、詳細は不明である。

なお、木簡の釈読にあたっては、国立歴史民俗博物館の平川南氏にご教示いただいた。

9 関係文献

(財)石川県埋蔵文化財センター『石川県埋蔵文化財情報』三・四号（二〇〇〇年）

（金山哲哉）

石川・中屋（なかや）サワ遺跡

1 所在地　石川県金沢市中屋町・福増町

2 調査期間　二〇〇一年度調査　二〇〇一年（平13）六月～二〇〇二年三月

3 発掘機関　金沢市教育委員会

4 調査担当者　谷口宗治・前田雪恵・向井裕知

5 遺跡の種類　集落跡・荘園跡

6 遺跡の年代　縄文時代～近世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

中屋サワ遺跡は、手取川扇状地の扇端部に位置する縄文時代後・晩期から近世に至る複合遺跡である。近くを流れる安原川・中屋川によって、加賀郡津と考えられている大野湊と結ばれており、また遺跡から約二㎞南東に位置する野々市町三日市遺跡では、北陸道とみられる道路遺構が検出されている。中

（金　沢）